

contents

「児童・生徒の性に関する調査」……………	1
性教育の歴史を尋ねる②……………	7
もっと知りたい女子の性⑤……………	8

今月のブックガイド……………	10
JASEインフォメーション……………	11

「児童・生徒の性に関する調査」

東京都幼・小・中・高・心性教育研究会

2014 年版調査報告の経緯

東京都幼・小・中・高心性教育研究会では、1981 年以降、3 年おきに「児童・生徒の性」実態調査を実施している。最近の性教育に対する風評の影響で実態調査の協力・理解が困難な状況の中、2008 年以来 6 年ぶりの調査結果がまとまった。以下、概要を述べ報告する。

調査のねらいは「児童・生徒の生理的・心理的な発達の状態や性的な行動の実態を明らかにして、学校における性教育の重要性に対する理解を深めるとともに、性に関する指導内容の適正化を図ること」であり、この調査の精神は 1981 年の初回調査から今回に至るまで変わらない。今回の調査は 2013 年 12 月に東京都内の公立の小・中・高等学校を対象に実施した。

特に小学校で調査への理解を得ることが難しく、調査協力校は当初予定の約 3 分の 1 にとどまってし

まった。しかしながら、小中高合わせて 7,000 名近くの児童・生徒の実態調査が行うことができたことは意義深く、協力していただいた方々に心より感謝を申し上げたい。

調査対象数

小学校	男子 541 名	女子 509 名
中学校	男子 1,253 名	女子 1,387 名
高等学校	男子 1,477 名	女子 1,715 名

2014 年版調査報告の概要

今回の実態調査での特徴的内容は、①異性に対する意識、②二次性徴、③エイズについて、④性的接触（性交）、⑤性情報、⑥自信の有無と行動様式、の 6 点が挙げられる。

- ①小学生の異性に対する意識では、男女間のつき合いが前回よりも児童同士で特別視されなくなった。
- ②二次性徴では、小学生が、体の変化を「ふつう」

と答えた割合が半数近くに達し「うれしい、楽しみ」と回答している割合を加えると9割を超えている。これは、保健の授業で二次性徴を学び、体の発育についての正しい知識を学んだ結果、自らの性を肯定的に受け止めていると考えられる。

中学生男子の精通経験は、人によって様々であり、その時期を正確に知ることは難しい。男子で「質問の意味が分からない」と答えた生徒は、保健体育の授業で指導されていても実体験が伴わないため、理解できていないと考えられる。

中学生女子は「質問の意味が分からない」と答えた生徒が各学年ともたいへん少ないことは、女子の初経指導が家庭、学校で定着しているためと考えられる。結果から読み取れるのは、中学生男子の発育の遅れが懸念され、原因の究明が必要である。

- ③エイズの学習は保健の授業での指導内容であるが、小学校で学習する機会が少なくなり、全体的に正しい知識をもつ生徒が減少してきている。
- ④性交に対する考え方では中学生における肯定的回答に男女差はあまりないが、学年が進行するにつれて高くなっていることが読み取れる。高校での調査結果からは肯定的回答数が減少傾向にあり、相手も傷つけないが自分も傷つけないとの心理、コミュニケーション能力の低下や人間関係の希薄化などが背景にあるかなど慎重に分析する必要がある。
- ⑤中学生ではインターネット利用率の増加により犯罪の被害者、加害者になったり、自分の心が傷つけられたりする可能性を十分に指導する必要がある。高校生ではインターネット等の媒体からの情報が中学生以上に身近にあり、得たいと思わなくても情報が入ってくる環境に置かれていることに注目すべきである。今後は小学生の早い段階から発達段階に応じてインターネットの活用や情報の取捨選択について十分に指導する必要がある。
- ⑥高校生の自信の有無と行動様式の調査から、「自分の考えや行動に自信あり」集団の生徒は、異性に対する働きかけに積極的な傾向を示している。しかし一方で、「どちらとも言えない」生徒が大半を占めていることも注目すべき結果である。

(文責 井口一成)

中学生の実態、大きな変化と特徴

前回の調査から6年の隔たりがあったため、中学校実態調査委員会では質問項目の文言や選択肢の見直しや、現代的な課題に対する新たな項目の追加等を検討した。特にインターネットやケータイ・スマートフォンなどの項目は、時代に合った内容に変更し、合計26項目の質問項目を実施した。

また、生徒のプライバシー保持のため質問項目は二つ折りにした用紙の内側に印刷し、回答用紙は質問用紙に挟み込んで、回収するように工夫した。

質問内容は、委員会での検討の結果、性の自認や家庭の役割、二次性徴に伴う身体や心の変化、異性に対する関心や行動、性に関する情報等に関することとした。

今回の調査実施にあたり、サンプル数を従来の各学年男女別500人、合計3,000人を目標とし、都内の地域に偏りが無いよう実施校を検討し依頼した。結果、多くの学校の協力や支援を得て、目標の9割にあたる2,700人に近いサンプル数を得ることができた。若干の地域の偏りもあったが、都内広域の中学校から協力を得ることができた。

今回の実態調査結果を分析して、中学校実態調査委員会として特に注目すべき4点の項目について考察を加える。

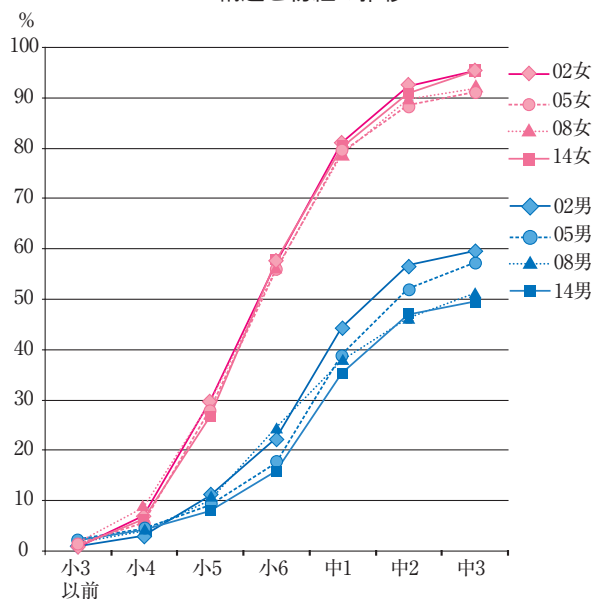
1. 二次性徴に関すること

「男の子に質問します。はじめて射精があったのはいつですか」「女の子に質問します。初めて月経があったのはいつですか」では、小学校3年生から中学3年生までの累積を、過去の調査と比較してみた。

結果、女子は大きな変化は見られず、中学3年生までにはほとんどの女子が初経を経験しているのに対し、男子は調査ごとに射精を経験している生徒が減少し、今回の調査では50%を割っている。2002年と今回の調査データでは、約10ポイントの差が生じている。

近年、東京都の中学生男子の体力が、全国的にみて下位であることと、男子の性の成熟の遅れとの関連性が懸念され、その原因究明が必要である。

精通と初経の推移

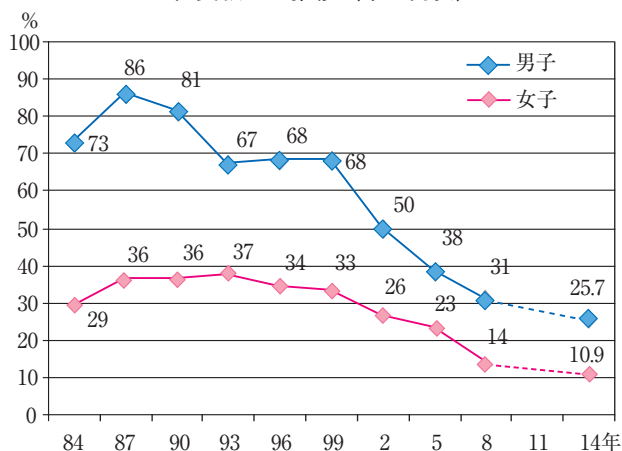


2. 異性に関すること

「あなたは、今まで性的接触(性交)をしたことがありますか」では、過去の調査からの推移をみると、3年男子では「ある」と答えた生徒の割合が、87年の86%をピークに激減し、今回の調査では25.7%と50ポイントも減っている。3年女子も約25ポイントも減っている。

これは先に述べた男子の発育の遅れなどとの関連が懸念されるほか、「草食系男子」と言われるような若者が増え、次代を担う世代がさらなる少子化を進行させるといった、大きな社会問題に繋がる可能性がある。

性交願望の推移 (中3男女)



3. 性情報に関すること

「あなたは、インターネットにつながる機器を持っていますか。持っているものをすべてこたえてくだ

さい」では、ケータイとスマートフォンと合わせると中3男子で81.5%、中3女子で95.8%になる。複数回答ではあるが、ケータイとスマートフォンの両方を持っている中学生は、ごくわずかと思われるので、男子で8割前後、女子で9割以上の中学生が所持していると思われる。

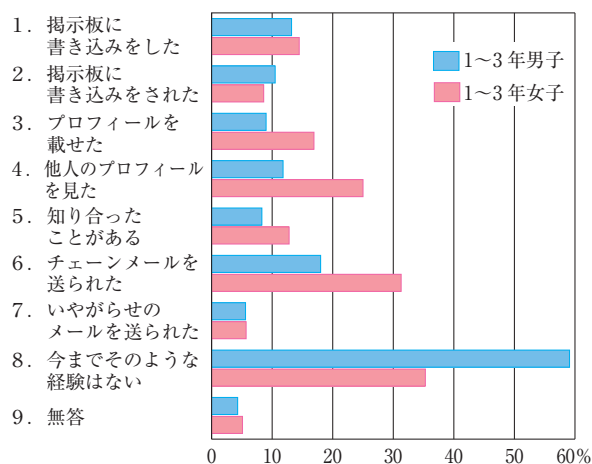
インターネットにつながる機器の有無

	中3男子		中3女子	
	数	%	数	%
1. ケータイ	148	32.0	203	43.3
2. スマートフォン	229	49.5	246	52.5
3. タブレット型パソコン	86	18.6	74	15.8
4. ノートパソコン	176	38.0	210	44.8
5. その他	73	15.8	37	7.9
6. 無答	53	11.4	28	6.0
計	765	165.2	798	170.1

調査数 男子 463 人 女子 469 人 (複数回答有)

「あなたは、インターネットで次のような経験をしたことがありますか。経験したことがあるものをすべて答えてください」では「今までそのような経験はない」と「無答」の2項目以外は、学年が上がるほど経験の割合が増加している。「プロフィールを載せたことがある」と「他人のプロフィールを見たことがある」は、女子の経験が男子の経験の約2倍となっている。「経験がある」という内容のほとんどの項目で、女子が男子を上回っている。今後、インターネット等で不特定多数に自分のプロフィール等の個人情報を載せることが、犯罪の被害者になったり、自分の心が傷つけられたりする可能性に

インターネットでの経験



についても、十分に指導する必要がある。インターネット等の媒体からの情報が身近にあり、得たいと思わなくても情報が入ってくる環境に置かれていることに注目すべきである。

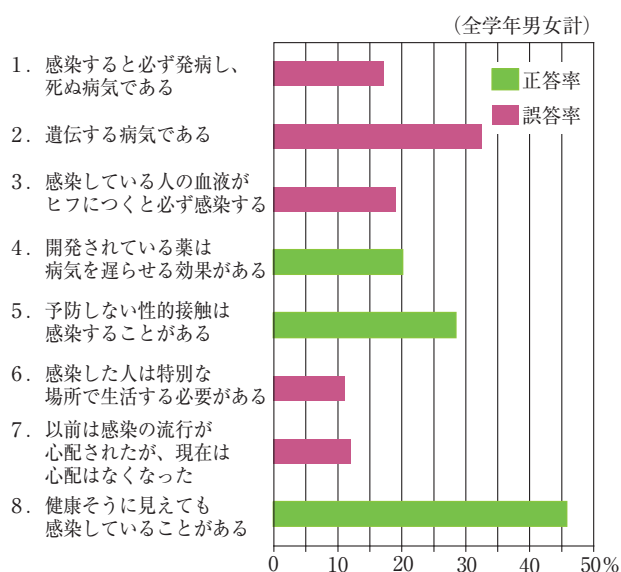
4. エイズに関すること

「エイズについて、正しいと思うものを次の中より選んでください」では、8つの質問項目のうち正しいのは、4・5・8の3つで、それ以外の項目は誤答である。

「開発されている薬は病気を遅らせる…」 「予防しない性的接触は…」 は学年・男女に関係なく正答率が低い。「健康そうに見えても…」 は、全体では45.9%だが、1男は36.0%と低い。「遺伝する病気である」については、1男が50.8%の誤答をしており、全体でも32.7%の生徒が誤答している。

エイズの学習は保健体育で学ぶが、小学校で学習する機会が少なくなっていることから、誤った知識を持つ生徒が増えていると考えられる。また、以前ほど、マスコミなどにより社会で話題にならなくなったことや、中学校では3年生の保健体育の授業で初めて指導されるため、調査時点でまだ指導されていないことも予想される。

エイズについての理解



今回の調査結果から今後も様々な新たな課題を見つけ、これからの「学校における性教育」の指導の充実に役立てていきたいと考える。

(文責 福迫 潮・桐川 勲)

高校生の実態、大きな変化と特徴

現在、高等学校で展開されている性教育は、教員間の性教育に対する経験と理解度の違いから、その実践には戸惑いや混乱が生じている。一方、性に関する意識や価値観が多様化し、生徒を取り巻く家庭環境や社会環境は大きく変化し、生徒の性に関する不安や悩みは多様化するなど、生徒個人では性に対する課題が克服できにくくなっている。

日本では、2000年代後半から若者男性が、恋愛や性行動に消極的になり、いわゆる「草食化傾向」を示し始めたとの指摘がある。『「若者の性」白書』(日本性教育協会、2011年)にもそうした青少年の変容についての問題提起があるが、本アンケート調査でも同様な傾向がみられている。その原因については本調査では明らかになるものではないが、現代の高校生の性に関する考え方や行動に変化があることは事実のようだ。

以下、主だった傾向を示す。() は08年の数値を示す。

1. 異性との交際について

「現在あなたは特定の異性と交際していますか」の問いには、高校生同士の交際が最も多く、男子生徒の17.5%、女子生徒の17.2%が同じ高校生同士の交際であるが、ここで注目したいことは、08年調査と比較して、男子では77.9% (77.0%)、女子では76.2% (73.8%) の生徒は「異性との交際がない」と答えており、男女ともに増加していること、「特定の異性と交際している」と答えた男子生徒が19.0% (20.0%)、女子では22.9% (25.2%) であり、男女ともに減少傾向にあるということである。

前述の『「若者の性」白書』の執筆者の一人である高橋征仁氏は第2章「2.5 性別隔離の解消」の項で「2011年の調査結果からみると、恋人がいる割合は、中学生の1割、高校生で2～3割、大学生の3割強にとどまっている。したがって、異性の友人がいらないという意味での性別隔離は解消されつつあるが、必ずしも恋人のいる者が増加しているわけではない。このような異性との接触機会の増加と恋愛の実現可能性との間にある隔たりこそが、『草食化』

をめぐる議論の混乱を読み解き、その内実を理解していく重要なポイントであると考えられる」と述べている。そうした意味で本調査でも、異性に興味を示す時期であるこの時期にこうした結果であったことについて分析することも興味深い。

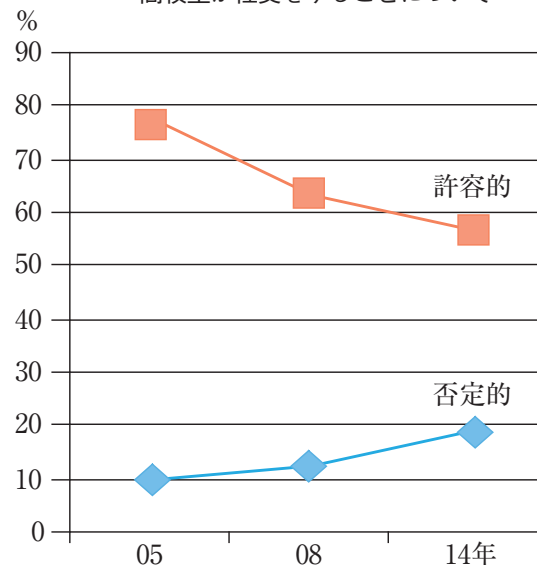
2. 高校生の性交について

「あなたは、高校生が性交することについてどう思いますか」という問いについては、「許容的見解」において、男子で61.0% (62.1%)、女子では52.5% (64.3%)であり、「許容的見解」の男子での微減、女子で大きく減少している。一方、「否定的見解」については、男子で15.8% (12.2%)、女子では21.8% (12.6%)となっていて、ここでは男子の微増、女子の大幅の増加が見られた。また、「許容的見解」について男女平均値の比較を05年調査まで拡大すると、05年調査から08年調査で14.1ポイントと大きく減少し、今回は08年調査から、さらに6.6ポイントの減少をみている。

一方、「否定的見解」は、08年調査では2.6ポイント増加し、今回はさらに6.4ポイント増加していることは性行動に対する消極的な女子高校生の姿が見て取れる。しかし、同じく執筆者の片瀬一男氏は前述の『若者の性』白書の序章「5.1 性行動の日常化・分極化」の項で、「性が『特別なもの』ではなくなったから関心も低下するという性行動の日常化が生じていることがみてとれる」と指摘していることは興味深い。また、「高校生の性交については考えたことがない」の男女平均の回答が、08年調査で5.1ポイント増加し、今回ではさらに5.6ポイント増加するなど、ここでも同様な傾向が現れているが、消極的高校生の姿なのか、日常化なのか興味深い。

さらに、「許容的見解」の具体的な内容を08年調査と比較すると、「愛情が深まれば可」は、男子9.7% (15.7%)、女子7.8% (14.7%)と、男女とも激減。「機会があれば可」は、男子3.9% (3.5%)、女子0.5% (1.4%)と、男子微増、女子減少である。「お互いが納得すれば可」は、男子29.2% (26.5%)、女子19.4% (24.2%)と、男子が増加、女子減少となっている。「避妊・感染症予防を心がけるなら可」は、男子18.2% (16.7%)、女子24.8% (24.0%)と、男

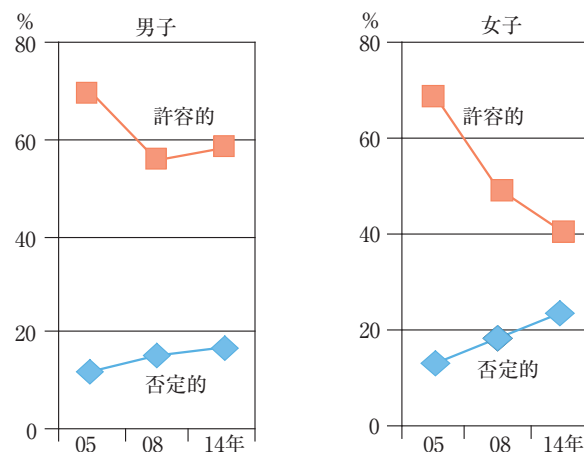
高校生が性交することについて



子が増加している。「考えたことがない」は、男子22.3% (19.2%)、女子24.4% (16.4%)と、男女とも増加している。

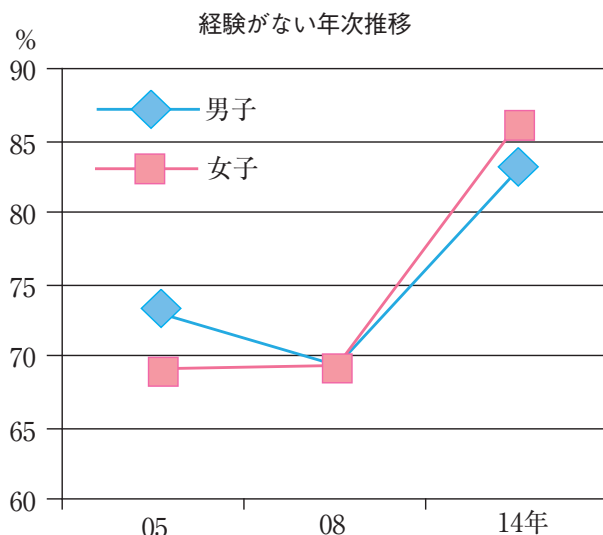
「あなた自身が性交することについてどう思いますか」という生徒自身の性交についての質問では、「許容的見解」は、男子で57.8% (56.0%)、女子で40.6% (49.5%)と、男子では微増で、女子は減少した。それぞれの内容では、「避妊・感染症予防を心がけるなら可」は、男女差はなかったものの、「愛情が深まれば可」「機会があれば可」「お互いが納得すれば可」は、男子の許容度が高かった。一方、「否定的見解」は、男子16.7% (15.1%)、女子23.4% (18.1%)と、男女とも増加の傾向が見られたが、「性交について考えたことがない」という生徒が、男子24.4% (21.8%)、女子では35.1% (24.9%)と男女とも増加の傾向にある。さらに、「高校生が性交する

自身が性交することについて



こと」と「自分が性交すること」の「許容的見解」だけを比較すると、前者は、男子が61.0%、女子では52.5%、後者は、男子57.8%、女子で40.6%であることから、高校生が性交することは許容できるが、自分が性交することには否定的な態度をとる傾向が特に女子に高い。ただし、08年調査では「高校卒業まではしないほうがよい」という回答項目があったため、今回の調査とのデータの整合性は十分に取れていない。

性交のきっかけを問うた質問で明らかになった「性交経験がない」と回答した生徒が、男子では05年調査73.1%、08年調査69.2%、14年調査83.1%となっていて、女子では05年調査69.1%、08年調査69.2%、14年調査86.3%となっており、男女とも前問同様、高校生の性行動についての慎重な態度が見てとれる。



いずれにしても、高校生の性交に対する消極的論や慎重論、草食化論、日常化論を議論することも大切であろうが、学校教育においては、性交することによって不幸を決して招かぬような、適切な意思決定、行動選択ができるような生徒の育成の必要性を一層痛感している。

3. 「自信の有無」と「進路選択」や「異性とのかわり方」に関するクロス集計について

「普段の生活で自分の考えや行動に自信がありますか」の問いについての「自信あり集団の生徒」は、進路や異性の対する働きかけに積極的な行動をとる傾向を示している。しかし一方で、「自信について

はどちらとも言えない」という生徒が大半を占めていることも事実である。従前から、同性や異性との人間関係や現在及び将来の生活において直面する性に関する諸問題に対して、適切な意思決定や行動選択ができる生徒の育成は大きな課題とされているが、併せて生徒の自尊感情を高めることに着目した指導も必要となっている。そのためには、家庭、学校、地域社会のあらゆる場面において、人間尊重の徹底を図るとともに、人間の性に関する基礎的・基本的事項を正しく理解させることはもとより、生徒の自尊感情を高めるための働きかけの在り方を工夫することが重要となっている。（文責 野口敏朗）

今後の学校における性教育について

学校における性教育は、人格の完成を目指す「人間教育」の一環であり、「人間尊重」の精神に基づいて資することが重要であると考ええる。生徒の発達段階を十分に踏まえ、学校全体で共通理解を図り、家庭や地域との連携を推進し、集団指導と個別指導との密な連携をも図り、生徒に夢と希望を与える性教育の実践に本調査を役立てていただきたい。

そのためには、児童・生徒が学びたいと思っていることと教育関係者が必要と思っている指導内容が一致することが重要であると考ええる。

本報告書が先生方の性に関する指導を適正に行う教材として参考になれば幸いである。



※詳細は2014年調査『児童・生徒の性に関する調査報告』（東京都幼・小・中・高・心性教育研究会発行）
m-iguchi@sea.plala.or.jp

性教育の歴史を尋ねる

戦後・純潔教育編

茂木輝順

第21回 香川県における性教育現状調査

もてぎ てるのり
女子栄養大学大学院栄養学
研究科保健学専攻博士後期
課程修了、博士（保健学）

前回は北海道純潔教育委員会について述べました。北海道以外にも、愛知県と香川県で純潔教育委員会が結成された形跡があるのですが…。愛知県については『愛知県戦後教育史年表』（愛知県科学教育センター発行）に1949年2月「純潔教育委員会発足」との記載があり⁽¹⁾、香川県については1949年3月5日に「香川県純潔教育委員会結成準備会」が開かれたと『四国新聞』が報じています⁽²⁾。本号の締切日まで調査を続けましたが、これら純潔教育委員会に関する詳しい情報を得ることができませんでした。

ただ、1949年6月12日の『四国新聞』に、次のような記述を見つけました。「厚生省では学校での女生徒に対する性教育現状調査都市に東京、高松、宇都宮の三市を指定したので香川県衛生部では高松高校三年女子組をモデルクラスとして近く学校、生徒の両方から調査を行う」⁽³⁾。厚生省による調査であることを直接的に示す裏付けはないのですが、栃木県公衆保健協会性病予防部会が発行した『めざめ』⁽⁴⁾という雑誌の第三集（1949年9月発行）に、「学校における性教育は如何におこなわれているか」というルポルタージュの「香川県の巻」と「東京の巻」が掲載されています。「東京の巻」の末尾には「栃木県の巻は紙面の都合で次号に割愛した」との記述があり、「東京の巻」を執筆したのが厚生大臣官房総務課弘報係員であることから考えると、『めざめ』に掲載されたルポは、『四国新聞』の言う厚生省による性教育現状調査である可能性が非常に高いと考えられます。

1949年から男女共学になったばかりの香川県立高松高校の女性教員2名と3年女子生徒5名、香川県の医務課長や予防課長などの役人4名、計11名による座談会が収められた「香川県の巻」について見ていきたいとします⁽⁵⁾。この座談会は主に医務課長や予防課長の質問に教員や生徒が回答するという形式で進められています。以下の2点についてまとめました。

①性教育の必要性についての教員の認識

教員の一人は「男女共学になってから性教育の必要

性を痛感しています。現在の所では、学校の教育環境がゴタゴタしていて、性教育に対してみつちり取り組む段階には至っていません」と答えています。別の教員は「性に関する知識は、女学校で教えると言うよりも、家庭に於て、不知不識の裡に覚えさすのが一番いいように、私は考えます」と述べていますが、性教育が不必要だという意味ではなく、「性の芽生えは、既に五、六才にして始まるとも言われているが、そうした時代から、すこしずつ激せず、執せず教育して行すべきだと思う。女学生の年頃になれば、相当好奇心があるため、性知識を自然な形で教えこむという事は、難かしいのではないか」というところに真意があるようです。「一年生の時、体操の先生から（月経について）教えられました」と述べている生徒がいるものの、実際には学校での性教育はあまり行われていないようです。

②女子生徒たちの性教育への要望

「科学的方面から真剣な態度で教えて貰いたい」「科学的な性教育をして欲しい」「専門家におしえていただきたい」など、生徒からは「専門家」による「科学的な性教育」の要望があげられています。そしてこれに留まらず、「科学的な面からのみの性教育では、生きて行く上に、大きな失望を感じます。これと併行して、もつと精神的な面からの教育を望みたい」と述べる生徒もいます。さらに、「一つの『礼儀』の教育がほしいと思うんです」「今迄は、女性ばかりに対して、礼儀だ一作法だ一と押しつけられてきましたが、男性にももつと礼儀、作法の教育を望みたいと思います」と男性への教育の不在を痛烈に批判する意見も述べられています。

【注】

- (1)『愛知県戦後教育史年表』愛知県科学教育センター 1965年 p.72
- (2)『四国新聞』1949年3月6日 p.2
- (3)『四国新聞』1949年6月12日 p.2
- (4)この性教育雑誌『めざめ』については、下田が当時の栃木県内の性教育の状況の整理とともに、詳細な言説分析を行っています（下田太郎「占領下の地方における性と生殖の啓蒙的言説—性教育専門誌『めざめ』について」『Intelligence』11号 2011年 pp.129-144）。
- (5)『めざめ』第三集 栃木県公衆保健協会性病予防部会 1949年9月 pp.24-26。なお、座談会の参加者の一覧には「香川県立高松第一女高校」と記載されていますが、高松第一女子高校は存在せず、座談会の中で「高松高校」という発言もあることから、参加しているのは高松高校の女子生徒と教員であると考えられます。

大学生向けに講義をするとき、大人だからいいかとはばかりに私の通常トークを繰り出すと、高校時代に聞きたかった、という声があがります。特に、最近マスターズ&ジョンソンの性反応の4段階や、自然家族計画法として膣に自分で指を入れて排卵期を知る方法などを一般女性向け講座や、お母さん向け講座で話していますが、高校で話すには若干ハードルが高いものです。それでも、理解ある養護教諭の下では将来のこととして話させてもらっています。

性教育とは何を語り伝えることなのでしょう。性は生のことであり、命のことだと言われます。公開中の映画『インフォマニアク』で、「愛とは嫉妬交じりの強い性欲に過ぎない」とありますが、性を愛で語るのは無理なのかもしれません。細胞一つ一つに敬意を払えば、自ずと答えは出るのではないのでしょうか。教育、というより日々の学びであり、そしてそれはそのままその人の生き様でもあるのです。



演題を出しそびれたものの、休暇と航空券が押えてあったので、第13回 AOFs (アジアオセアニア性科学会) のためオーストラリアのブリスベンに向かいました。会期は10月22日～25日、あちらの季節は春、ジャガランタの真紫の花が咲き乱れる美しい季節。国際学会に出るようになって思うのは、本質的なことは世界各国で同じであるということです。今回、私にとって最も幸運だったのは、SEX AND MOTHERHOOD (性と母性) の講演をされたビビアン・キャス准教授に出会えたこと。妊娠中と産後の性機能の調査をしようとしている自分にとって、後押ししてもらえた気がしたし、いつでも相談に乗ってもらえたことは何より心強く思っています。

キャス准教授の講義では出産オーガズム、授乳オーガズム、などの言葉が飛び交います。当たり前といえば当たり前のことですが、性器の反応を伴うことは性的なことです。オーガズムはなければいけない、とい

うものでもなく、若い女性がオーガズムとは何かわからなくても仕方ないし、知りたければ一生をかけて追及してみればいいのではないかと思います。

男性中心に考えると、妊娠しているのだから性的なことは関係ない、むしろ、妊婦は対象外、かもしれませんが、妊婦側からしたら新しいステージに進んだだけで、性的でないなんて、他者に決められることではないのです。もちろん、他の行為と同様、出産でイカなければいけないなんてこともないし、セックスでもマスターベーションでもイカなくてもいい。オーガズムを得るのは、知識と経験、そして少しの偶然からなるのではないのでしょうか。目的、ではなく結果と考えたらいいのかもしれませんが。女性として女性側から見ると、冒険のように新しい局面が用意されています。それは加齢だけでなく、月経周期、妊娠中、産後、授乳中、そして更年期以降まで、同じ性行為でも見える景色が相当違うと思うことができます。違う自分に会える、といえいいのかもしれません。



フリードリヒ・ニーチェが著書『ツァラトゥストラはかく語りき』で「女は何もかも謎だ。だが、女の一切の謎を解く答えはただ一つである。それはすなわち妊娠である。」(水上市英廣訳、岩波文庫)と述べているように、「妊娠」は女性を語るのに重要なキーワードです。逆に妊娠という事象を完全に無視するならば、月経はピルでコントロールすればいいし、性は男性も女性もなく、性的快感に素直になればいいだけのことでしょう。

卵子が卵巣から排出され、精子と卵管で出会うということ。受精が起こってできた分割卵が転がりながら子宮内膜の着床場所を探す。絨毛が子宮内膜にもぐり込み根を張る。新しい命にとって胎盤の完成は、宿主の乗っ取り完了とも言えます。異物である受精卵を受け入れる生物学的寛容は、そのまま母体の寛容と重なります。一見受け身とも取れる妊娠状態は、しかし、

次の世代への果敢な挑戦でもあります。新しい命は、胎内でしか育まれないし、母体の状態如何で育たない危険性も孕んでいます。男性は自分の大事な子孫をパートナーに託しているという自覚を持つべきですし、出産に立ち会った夫たちが発する「言葉になりません」という感動は、産む側にない男性ならではの感性で、我が子に会えたという生命の不思議のなせる業ではないかとしみじみ思います。



女性ばかり大変、と不公平感を募らせる女性もありますが、妊娠特権のない男性の身を考えてみてはどうでしょう。出産の快感、授乳の満足感を味わう権利すらない男性にとって、それは手の届くはずもないことであるがゆえに羨望の対象にもならないのかもしれない。出産にしても授乳にしても、経験のないことであれば、最初は性交と同様、試行錯誤であるのは致し方なく、しかも、ご丁寧に「痛み」と表現される感覚を伴うためにことは面倒なものです。出産の痛みも、授乳の痛みも、あるいは最初の性交で痛みを感じたとしても、それが経験を重ねてやがて恍惚へと変わるとしたら、それこそが女性の性の豊かさ、すなわち変化する体への憧憬と考えることができます。勃起、射精しかほとんど変わることのない男性のからだは、ある意味、シンプル過ぎて気の毒ですらあります。だからこそ、双方の喜びを共有できる関係性こそ、性的関係に求められるものなのではないかと思えます。

出産の医療化は、20世紀に大きく変化し、頻繁な妊婦健診や超音波検査等の普及によって安全性が増したのは喜ばしいことです。一方で、出産の医療化は、女性の産む力、子どもの生まれる力を過少評価しているかもしれません。高齢出産の増加は、妊娠できないという不安、体外受精で妊娠したけれど、産めないかもしれない不安など、女性が医療に頼るのを医療も歓迎しているかに見えます。しかし、本来の出産とは、月経と同じような生理現象が10か月という月満ちて排出されるだけのことであるはずす。

会陰切開というおせっかいは、女性を怖がらせます。大学では切り方と縫い方を習いますが、下手なお産をいくら練習しても上手くはならない。つまり本質

的なお産を大学で教えない限り、女性にとって自然な出産など絵に描いた餅でしかない、という現状は大学教育から見直さない限り達成不可能であるという結論を得ることができるでしょう。月経の延長上にある子宮内容物の排出と考えれば、何も陰部を切ったりしなくても出るはずであり、陣痛の痛みも月経痛の延長上にある鈍い痛みであることが理解できるでしょう。

足があるから走らなければいけないか、という問いと同じように、子宮がある女性に生まれたら産まなければならないかというそうではなく、あくまでも産む可能性を持つというだけのことです。ただ、月経や性交は出産の前段階とみなすことができ、出産、産後も一連の性的生理現象と考えることができるのではないのでしょうか。女性のからだは、生殖を重く担う側として、折に触れて出産を視野に入れて語られます。現代女性がかつてよりは少なく、生涯に数回の妊娠を経験することがあると考えられますが、過去も未来も妊娠そのものが必ずしも幸せな体験を意味するものではありません。流産もあれば、予定外の妊娠も起こります。望んだ妊娠でも体調不良や合併症が起こり得ます。昨今の帝王切開率は20%なので、母の5人に1人はお腹に傷があるという時代になりました。

また、子どもを産むという意味に止まらず、妊娠期間の過ごし方はどうしても自分中心ではなく子どもを育む客体としての母体として語られ、女性は受け身的な人生を引き受けざるを得ないと感じがちです。女性の体が単なる客体として存在するならば、卵子や、子宮、そしてたくさんの精子もまた、大した意味を持たないものとして存在するのでしょうか。細胞や組織に意味がないなら、その総体にも意味がない、すなわち生きる意味とは何かと言う問いに永遠に答える手がかりを失うことになるのではないかと思えます。

出産の現場は、産科医不足で汲々としています。しかし、出産の本来の意味を解さないで医療としてのみ扱えば、そこに人生の意味さえ入り込む余地はありません。生まれるべくして生まれる新しい命たちをどう迎えるか、それは生命倫理と人生論、そして性哲学的思考の下に解釈されることが望ましいと思いながら、日々の診療に当たっています。

BOOK GUIDE

今月のブックガイド

秘められた日本の伝統

いままで春画に登場する男たちの巨根ぶりは、まったくもって理解できなかった。あのデカさは、当時の日本人の平均からしたら、「写実的でない」どころの騒ぎではないだろう。

それが本書『わらう春画』を読んでもみると、意外や腑に落ちた。「春画絵師たちは（略）男性のサイズコンプレックスを非常によく理解し（略）ペニスの標準的なサイズを度外視した」。つまり、巨大に戯画化することで、自分と比較しようとする発想をもたせなかったというのだ！ 春画研究には異なる見解もあるのだろうが、この分析はユニークでありながら男心の機微をつかまえている。

著者は1989年来日して以来、日本のエロティックアートの魅力に取り憑かれた古美術研究家、世界最大の春画コレクションを有するオフエル・シャガン氏。彼はその自由な着眼点において、我々が忘れてしまった近代以前の日本人の性愛を論じている。

シャガン氏は春画を性的刺激を喚起するだけのポルノではなく、「様々な社会的メッセージを表現・伝達するために、性的題材を扱ったアート」だと定義する。単にマスターベーションを誘発するために作られたポルノとは似て非なるものだというのだ。その社会的メッセージは、セックスの手引きの役割もとい「性教育」、江戸時代のエンタメ情報記事としての「ゴシップ」、社会体制の下位に置かれたものたちの異議申し立ての表現である「抗議」、社会的な抑圧をまぎらわしてくれる「ユーモア」、道徳を確立するための訓話としての「性的モラル」……などの役割機能を担っていたとする。

例えば、レイプシーンの描き方。「絵師たちはレイプ被害者の苦痛を生々しく描くことに注力し、レイプ



わらう春画

オフエル・シャガン著
朝日新書
定価 1200 円＋税

犯を悪魔や奇形の生き物に描いた。春画に登場するキャラクターの中で最も醜く描かれたのがこのレイプ犯であった」。単なるポルノなら性欲を刺激しさえすればよく、モラルを介入させる必要ないが、春画には良いセックスと悪いセックスがあることが明確に意図されている。

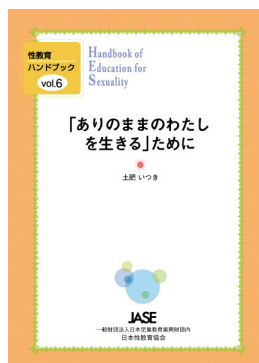
また、そこに描かれた男女の多くが、夫婦で、「結婚生活がこんなに幸せだなんて、思わなかった」という文句が挿入されていることも少なくない」という。ここにも著者は、婚外セックスが中心の西洋のポルノとの違いを見い出す。さらに、男の快楽が中心に描かれるそれに対して、日本の春画は女性の性愛が主体的に、また肯定的に表現されていることに注目する。男性向けの作品と女性向けのものがほぼ同数であることから、「男女が同様に春画を楽しんでいたという証である」と。

前近代の日本の性はこのようにユニークで豊かなものであったにもかかわらず、現在、こうしたアートはアカデミアからは等閑視され、本格的な展覧会すら開催することができない！ 著者は皮肉を込めていう。「昨日本はエロティックアートに関してどんどん制限を厳しくしている。今日、西洋ではまったく制限のない『性器』の表現に、逆に日本ではモザイクをかけなくてはいけない」。今、性教育の先進国で行われていることが、日本にはかつて文化として存在していた、という歴史を我々はいかに受け止めるべきか。

無味乾燥な性器の説明や、生殖の機能的な役割についての性教育が、まったく学生の琴線に引っかからない現実こそ反省すべきなのに、教育の現場においては、それすらも批判される政治状況。この国の古来からの伝統に照らし合わせて、それはナンセンスだろう。保守的な人々にもぜひとも春画に接していただき、「日本の伝統」を尊重する精神を学んでほしいものである。
(作家 伏見恵明)

性教育ハンドブック Vol.6

12月20日頃発行



『ありのままのわたしを生きる』ために

土肥いつき 著

◆ A 5 判：86 頁、頒価 500 円

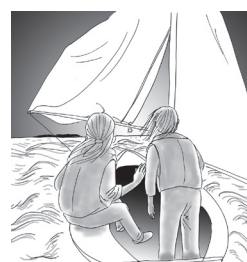
『現代性教育研究ジャーナル』に3年間連載された、「性別違和」である作者が悩みや葛藤の中で紡いできたありのままを語る自叙伝です。両親や友達との出会いの中で小さなトゲのような違和感を心の中の小さな箱の中にしまい込み、教員生活を送り、Jさんと出会い、そしてSRSに向かい、女性として生きるわたしの航海を描いた新刊です。

主な内容

港にて（自分史の試み…） / 船出のとき（小さなトゲのような思い…） / 帆をあげる（教員生活のはじまり…） / 舵を切る（「身体改造の」開始…） / 嵐の中で / かすかに見えた航路 / 新たな旅へ

著者プロフィール

1985年より京都府立高校教員。セクシュアルマイノリティ教職員ネットワーク副代表、トランスジェンダー生徒交流会世話人、まんまるの会（関西医科大学附属病院ジェンダークリニック受診者の会）世話人代表など。映画『coming out story』に出演。



既刊〈性教育ハンドブック〉

☆性教育ハンドブック Vol.5 『21世紀の課題=今こそ、エイズを考える』 池上千寿子著 A5判・68頁 500円

☆性教育ハンドブック Vol.4 『性教育の歴史を尋ねる～戦前編～』 茂木輝順著 A5判・92頁 500円

※送料：1冊215円、2～3冊300円、4冊～6冊350円。

◆ JASE ホームページ <http://www.jase.faje.or.jp/pub/pub.html> からお申し込みいただけます。

または、Email info_jase@faje.or.jp

TEL 03-6801-9307 FAX 03-5800-0478

JASE 性教育・セクソロジーに関する資料室

資料室について

JASE 資料室は国内外の性教育、性科学等に関する文献資料を収集している開架式資料室です。文献資料の数は約6万点以上、現在も日々、増え続けています。性教育、セクソロジーに関する調査、研究のためにご利用いただけます。人間の性に関心がある方、ぜひ足をお運びください。

【閲覧】必ず事前に電話で予約が必要です（tel 03-6801-9307）。貸出業務は行っておりません。

【開室日・時間】月～金曜日 10:30～17:30

【休室日】土・日曜日、祝日、年末年始 ※この他、会議等で臨時に休室することがあります。

【コピーサービス】コピー料金は用紙サイズにかかわらず1枚10円です。著作権法の許容する範囲で行うものとします。

<http://www.jase.faje.or.jp/pub/archive.html>

平日の利用方法

日曜日特別開室

「学校における性教育振興のための事業」の一環として、資料室を公開していますが、現在は、平日のみです。学校で性教育の中心的役割を担っている教諭や養護教諭、学校と連携して性教育を実施している保健師・助産師、将来それらを目指している学生などが利用しにくい状況にあります。遠方に在住の皆さんからも、休日の資料室の開室を求める声が寄せられています。

ご要望に應えるため、平成26年度の最終回は下記の日程で資料室を開室いたします。

・開室の日 平成27年1月25日（日）

・開室の時間 10:30～17:30（利用日3日前の17:30までに予約があった場合、利用者の希望時間帯のみ開室）